

3月11日の東日本大震災から、はや3カ月半が過ぎました。2万人近い方々が亡くなられ、いまだ、多くの人々が行方不明のままです。あの日、停電で防災無線が使えないため、火の見櫓に登って半鐘を打ち続けて津波を知らせ、自分は津波にさらわれた消防団員の方がいました。また、最後まで、非難を呼び掛けアナウンスを続けて、津波にいのちを奪われた女性職員の方もおられました。私たちの胸を打ちます。

いまだに避難所では、家も家族も失った方が不自由な生活を続けておられます。両親も家も失い、兄と二人きりになった、ある避難所の中学生の少年が、親戚の家に移っていく時、こう話しました。「行儀よくして、迷惑をかけないように、生きていきます」。「迷惑をかけないようにします」ではなく、「生きていきます」と締めくくるのです。「死」というものと強烈に直面したこの少年は、まさに今、「生きています」ということを今までになく強く意識しているのだと、思いました。「私は生きていきます」。死を意識するとは、生きることを、意識するのです。人は、人生のさまざまな体験や試練の中で、自分の生き方が問われていると感じることがあると、つくづく思います。

今年の四旬節に、ベネディクト16世教皇は、東日本大震災で被災した7歳のエレナという少女からの質問に答えられました。「わたしはとても怖い思いをしました。安全だと思っていた家がものすごく揺れて、わたしと同じ年のたくさんの子どもたちが亡くなったからです。わたしは公園に遊びに行けません。質問はこれです。どうしてわたしはこんなに怖い思いをしなければならないのでしょうか。なぜ子どもたちが深く悲しまなければならないのでしょうか」。

教皇は次のように答えられました。「どうしてこのようなことが起きるのか、私にも分からない。けれども、イエスは、罪がないにもかかわらず、わたしたちと同じように苦しみました。そして、3つのことを知ってほしい」。

- 1) 神はそばにいてくださいます。たとえ答えが見つからず、悲しみのうちにあっても、神は皆さんのそばにいます。
- 2) 全世界の多くの人が皆さんのことを思い、助けるためにできることをしてくれています。
- 3) いつの日か分かるでしょう。この苦しみが空しく、無駄ではなかったことを。この苦しみの向こうには、いつくしみの計画が、愛の計画があることを」。

私は、東日本大震災の犠牲者のための祈りを、イエスのみ心にささげようと思いました。そして、被災者の悲しみをイエスのみ心に託そうと思いました。イエスはきっと、先の少女や子供たちも含めて、震災で大きな悲しみに襲われた人々をいやし、励ましてくださいます。

今日の福音で、イエスは「重荷を負うものは、わたしの元に來なさい。休ませてあげよう」と言われます。そうです、主・イエスよ、どうかこの人々の苦しみを顧み、あなたのあわれみ深い愛でいやしてください。また、「私のくびきは負い易い」と言われます。それは、この荷物が愛をもって担うべきものになるからです。主・イエスよ、どうか、被災者の方々が家族の地域の人々との愛の絆で固く結ばれ、この難局を乗り越えていくことができるように支えてください。

私たちは、イエスのみ心を通して、御父祈ります。いつくしみ深い神よ、家族や友人たちとの別れを語ることすらできずに亡くなられた方々を、あなたのみ手のなかに受け入れてください。また、遺された家族や友人たちにこの悲しみを乗り越えて生きていく希望をお与えください。

パウロは言いました。「一つの部分が苦しめば、すべての部分が共に苦しみ、一つの部分が尊ばれば、すべての部分が共に喜ぶのです」(コリントI 12・26)。

今、東日本大震災に対して、原発事故収束の見通しもついていませんが、政府は復興計画を作ろうとしています。国や行政が、被災者のこれからの生活の再建に当然、果たすべき役割があります。しかし、私たちもできることがあります。カトリック教会としても、これからの長い復興の道のりを、ともに歩み、支援を続けます。

イエスのみ心を思い、今、困難な状態に置かれているすべての被災者の方々にずっと、寄り添うことを約束しましょう。そして、亡くなった方々のために祈り、悲しみのうちにある被災者に、神が力と慰めを与えてくださいますように祈り、支援を続けましょう。